



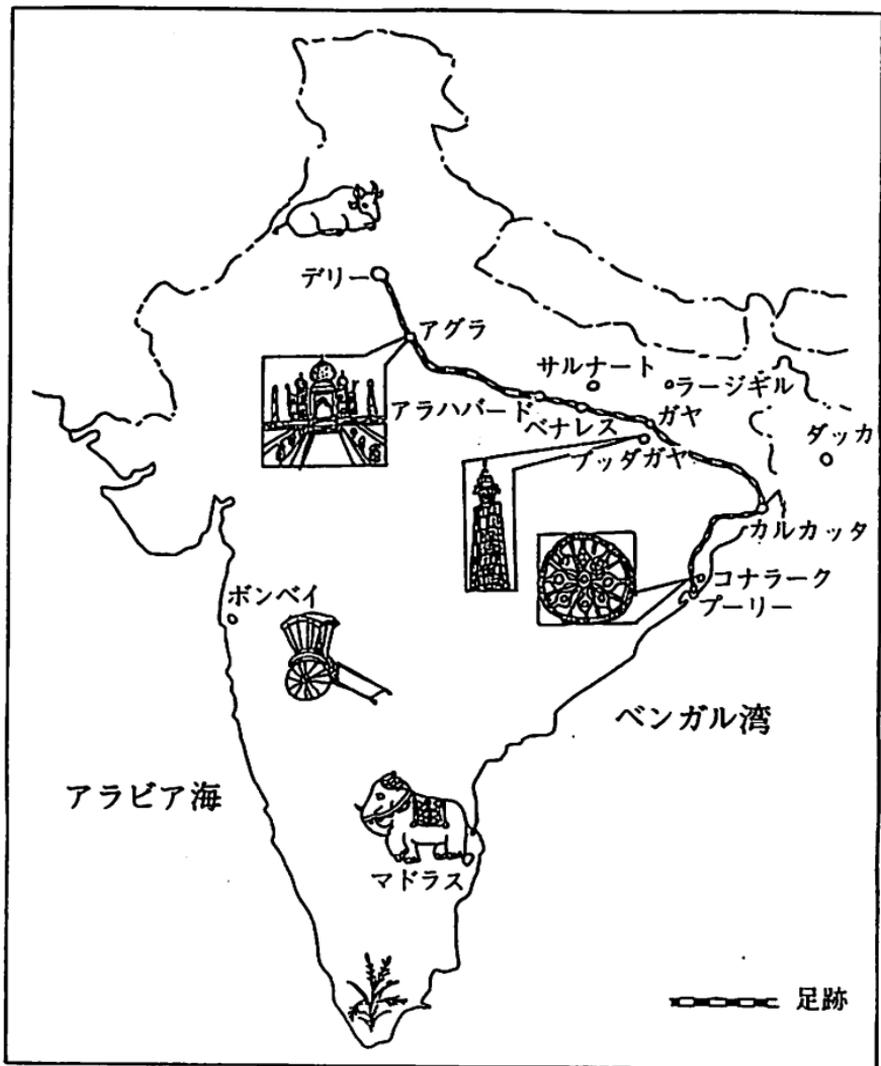
安い宿で
旅をして
インド

早川博信

安い宿で旅をして
インド

早川博信

コスモス社



安い宿で旅をしてインド／目次

ナマス テ インド 1

かなえられた私の夢 7

切符はいつになったら 12

聖なるガンジス河 17

ブッダガヤへ 22

サマンバヤ・アシユラム 27

娘二人つれて 33

安いチケットがルートを決めた 37

われわれはアジアの民 41

娘二人のはじめてのインド 47

プーリへ、一等コンパートメント 52

インドの薬は、とてもよくきいた 57

わたしたちも……………63

たいへんだった一日……………67

初めての外国……………71

見たこと、聞いたこと……………77

牛、あるいは牛糞燃料……………81

リキシヤ……………85

チャイ……………89

バス……………94

あとがき……………100

装帧 峰本 克子

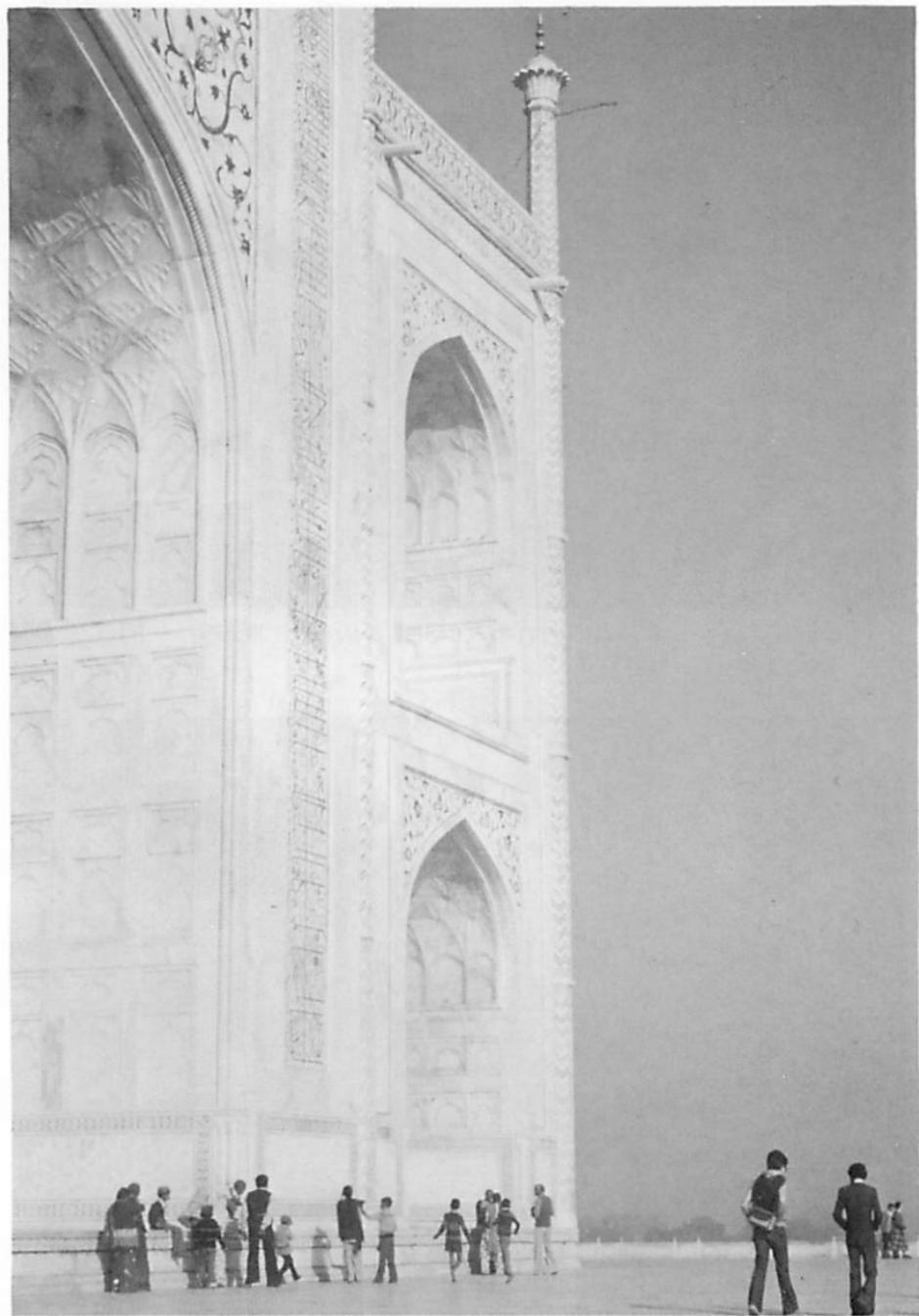
ナマスステインド



早朝のプラットフォームにわれわれの列車が入った(アラハバード)



ベナレス大学構内のリキシャ(ベナレス)



タージ・マハールは巨大な白大理石の建築物であった(アグラ)



列車を待つ人々、写っていないがすぐ近くに牛もいた(ガヤ駅)



ブッダガヤへの道、左に尼連禪河が流れる



ブッダガヤの子供たち、うしろの大塔は52メートルある



サマンバヤ・アシュラム(ブッダガヤ)

かなえられた私の夢

〈出 国〉

インドへは学生のころから行きたかった。もう十年になる。まだ見ぬ人のイメージがふくれ上がるように、インドに対する私の思いは、形而上学的に膨張しすぎていた。

せっかく行くのだから、団体旅行はしたくない。けれど、全く一人では、言葉やら何やらこれまた不安になってくる。それに飛行機代は個人では絶対に不利だ。あれこれ迷っていた。偶然、行きと帰りが団体扱いで、向こうでは全くフリーのツアーがあるのを知った。これにとびつく。これに決めた、自分に何度も言いきかせた。

成田。十キロちよつとのリュックは預けたし、手荷物の検査もパスした。出発一時間前になり搭乗下さいのアナウンスが始まる。十七人のわれわれのグループが、係官にパスポートをみせて、日本最後のゲートを通り抜けて行く。

その時、虫の知らせか、突然イエローカード（予防注射証明書）のことが気になる。他の人を見せてもらう。桜の花びらをあしらった検疫所の立派な証印がある。私にはな

い。あるのは、福井市内の病院の院長のサインと、その注射証明書だけだ。これでは、インドで通用しない。検疫所に行って証明してもらわなければならない。出発一時間前だ。私の脳髄に全身の血が集まる。

成田空港ビルの中三階にあるという検疫所の場所を聞いて、私は駆け出した。全速力で制服姿の空港関係者ならだれかれを問わず、尋ねまくり、走りに走る。かの名優チャップリンが、追いかけて逃げる時のあのスピードと身のこなしで、階段を駆け上り、廊下を走り抜け、汗だくになって、やっと事務所にたどり着く。

私の差し出したイエローカードを見て、係官が首をかしげた。コレラの予防接種証明書はOKだが、天然痘の予防接種に関する国際証明書はダメだ、という。よく見ると、私が前日、自分で打ったタイプの氏名のうち、YがTになっている。

「どうしてもダメですか」

「どうしてもダメです」

「私は今からインドに行くのです」

「ダメです。だけど、インドでは天然痘のイエローカードは要求しませんから、大丈夫行つてきなさい」

係官の言葉を信じるよりほかない。コレラの方だけ立派な証印をもらい、天然痘の方は検印なしのまま、私はまた走りに走った。どこの建物のどの廊下を通ってきたのか。パスポートをみせて、出国係官の前を通り抜けた時は、ホツとした。

ジャンボ七四七は、大きな機体を揺すって空中に浮いた。機首を上げてどんどん高度をかせいでいく。私のインド、天然痘の予防証明書がなくても入れて下さい。私は、実際は、接種をしてきたのだから。

〈デリー〉①

インド入国に関しては、何のトラブルもなかった。心配していたイエローカードには、係官は目も通さなかった。三時間半の時差を調整する。デリーはまだ闇の中。夜が明けるとまで、我々はホテルで仮眠となる。

日本ですでにインド国内の飛行機の予約をすませてきた人はそのまま目的地へと出ていったが、私を含めて四人は、行きたいところは決まっているものの飛行機の予約など全くやってない。デリーの初日は、まず旅行代理店へ出向いていくことで始まった。

朝食をとらなければならぬ。ホテルを出て、市街地へ向かう。ものの一キロも行くと、

急に人が増え車が増えた。絶え間なく鳴るクラクション、バイクとスクーターとオート三輪タクシーのエンジン音、きしみながら走るバス、我々は初めてインドの雑踏にほうり出される。日本では決して見られない無秩序さがある。

実は、この程度はたいしたことなかった。翌日、デリーの北部、オールドデリー駅からレッドホート（赤い城）にかけての人込みにまぎれ込むことになったが、そこでは、人がインド的に暮らしていく時に発するあらゆる音が全く無選択的に、無限にわき上がり、人の密度は、われわれの感性を混乱に陥れる程高かった。人間のすべての行為があり、どこにでも人はいた。

我々はホテルを出て、コンノート広場まで来ていた。ともかく朝食である。

昔の日本の駄菓子屋には、丸いアルミのふたの付いた四角のガラスビンが並んでいた。すこし緑色がかったガラスのあれ。そのビンに、ビスケットやクッキー風のものを入れて、店頭に並べている店がある。お茶も飲めそうだ。間口一間足らずのその店に入る。

片言の英語とヒンデイ語で（仲間のうちの一人の女性は、ほんのすこしヒンデイ語をしやべった）クッキー風のものと同ミルクティーを注文する。「チャイ」というインドのミルクティーは実においしい。熱い紅茶にたっぷりミルクと砂糖を入れる。田舎にいくと何か

知らない香料まで入れてくれた。

今度のインドの旅で、この熱いチャイを口にするたびに、私は、生き返り、ゆったりとした気分を楽しむことができた。

八十五パイサの朝食をおえる。(百パイサが一ルピー、一ルピーは二十五円)

旅行代理店のある有名なホテルまで歩く。歩道には何でもある。小さな自動車修理場から、日用雑貨、食料、その他すべて。日本のように、歩道はただ通りすぎるところでは決していない。

代理店の事務所には、きちんとネクタイをしめた青年がいた。国内線の飛行機の予約を頼む。

「今のところ不可能です。二日ぐらいいなれば」

「二日か？」

「そう、一月二日」

なんと今は十二月二十七日。飛行機をあきらめる。国鉄がある。列車で移動するのだ。この列車の予約が次に、なんとも難事業であった。

切符はいつになったら

〈デリー〉②

飛行機がとれないのなら、列車に乗って東に向かおう。どうしても、ブッタガヤまで行きたい二人と、どうしてもカルカタまで行きたい二人は、そう決心する。四人のインド珍道中はこの時から始まった。カルカタまで行く二人組の方は、帰りの飛行機だけOKとなる。私の方は何も無い。まずは、東に向かってベナレスへ。

旅行代理店のハンサムな青年は立派な英語で、ベナレス行きの列車の説明をしてくれる。そして、どこかに電話をした。

「今のところ、ファーストクラスはとれません。外人旅行者は、ファーストクラスでないと大変です。夕方までにはなんとかしますから、夕方五時に来て下さい」

我々四人は、百五十ルピーの鉄道運賃を払って外に出る。デリーとベナレス間は七百六十キロあり、日本円にして三千七百五十円になる。彼は、受け取った紙幣を、各自の契約書にホッチキスで止めていた。紙幣をホッチキスで止めるのは、他所でもよく見た。

インドは今、乾期で、毎日晴れ上がり、日中はほどよい気温になる。

コンノート広場まで戻る。円形状の緑の芝生の美しいこの公園から、道は放射状に延びて、街がつくられている。芝生に寝ころんでインドの空を見る。休憩。

デリーには自家用車らしきものは皆無で、この広場からながめている限り、車と言えは国産車であるアンバッサダーのタクシーだけである。しかも相当古くなっている。車の修理は、日本の歩道にあたるところで、手際よくやる。かなり複雑な作業でも。どうも、歩道は通りすぎるところでなく、重要な生活の場になっているようだ。どんな店だって出ているのだから。

タクシーの他は、スクーターとバイク。これらが圧倒的に多い。ヘルメットをかぶって相乗りで、ぶつとぼしていく。バイクに人が二人程乗れるカゴを付けているのがオート三輪タクシー。ベナレスでは、オートリキシャといていた。これも重要な交通機関で、ずいぶんお世話になった。

夕方五時、また、かの旅行代理店に行く。

「今のところまだとれません、我々は全力を尽くしています」

「本当にとれるのか」

「おお、決して本[・]当[・]にとは言えません。しかし我々はベストを尽くします。結果は多^{イビ}分^ビです」。

実に論理的、あたりまえだ。また翌朝十一時に来て下さい、と言う。本で読んだり、人から聞いていたようになってきた。我々の切符は何時手に入るのだ。

〈デリーを出る〉

午前十一時、旅行代理店三回目の訪問である。ハンサムな青年は、昨日と違ったシャツとタイ。彼はかなりの上流階級に属しているのだろう。早速、列車の切符を尋ねる。

「もうすこし待ってくれたら……」

ああ、こんなことしていたらずっとデリー釘付けになる。第一この旅行記だって、いっこうに進まない。ホッチキスで止めた紙幣を返してもらって、われわれはわれわれで切符をとることにする。二等でもなんでも、ともかく東だ。

A嬢がパローダハウス（外人専用の旅行事務所）へ行く。彼女はデリーに知り合いがいて、その人の口添えのせいかどうか意外と簡単に切符が取れたと言って帰って来た。こんなことなら、最初からパローダハウスへ行けばよかった。二等寝台、ベナレスまで七百六

十キロ、五十八ルピーであつた。

夕方、オールドデリー駅に行く、駅の売店で時刻表を買う。これからずっと、こればかりながめて旅行するハメになる。ホームに列車は入っているのだがどのキャビンに乗り込んでいいのやら。実はまず、何番ホームにわれわれの列車が入ってくるのか、それを捜すのが大変だつた。切符の裏にはちゃんと算用数字で書いてあるのだが、インド風にくずしであるので判読できない。ホームにいる人に切符を見せて尋ねると、目の前の箱がオマエらのだと、教えてくれた。車輛の入り口に張り紙があり、それに一人ずつ寝台番号と名前が書いてある。

ホームは薄暗く、懐中電灯をとり出して順に名前を追っていく。われわれ四人の名がない。四人かたまって番号が打つてあるところがあつたので、そこに乗り込む。正解だつた。板だけの寝台。インドの人たちは毛布やら大きなスリーピングバッグを持ち込んでいる。三段ベッドは、すでに人でいっぱいだった。

日本の倍以上の客車をつないだアップパーインドイクスプレスは、夜八時十五分、定刻にオールドデリー駅を出る。ごつた返すホームをあとに、ゆっくりと。

目的地ベナレスまで十七時間の旅である。インドは内陸気候で昼間は半そでで快適だが、

夜はかなり冷える。オーバズボン、ヤツケを付けて、薄い薄いシラフカバーにもぐる。

アラハバード、朝八時。デリーから六百キロの地点だ。

「チャイヤー、チャイヤー」

と、素焼きの一つずつ形の違う赤土色の容器にチャイを入れてチャイ売りの少年が回ってくる。三十パイサ。温かいミルクをたっぷり入れたチャイが、冷えた身体にひろがる。ホームには、チャパティーや果物を売る店、土産、日用雑貨、なんでももある。

カーキト色の制服を着たポリス風の人突然、われわれをボディーチェック。カバンまでのぞき調べる。何がなんだかわからない。

「フリーユー（だれぞ）」

と私が尋ねると、彼は、だまって身分証明書を示す。エキサイティングポリス、麻薬専門のポリスで、もし所持していれば、即、刑務所入りと後で聞く。クワバラ、クワバラ。

聖なるガンジス河

〈ベナレス〉①

ベナレスに午後一時すぎ到着。インドの国鉄は時間が正確だ。今回の旅行は鉄道ばかりだったが、出発の時、少し遅れていても途中その遅れを取り戻してしまふ。それに同席したインドの人がとても親切で、当方はまずい英語なので、何度聞いてもわからないことがあったがそんな時筆談さえしてくれた。

ベナレス駅の構内で、リキシヤマン二人につかまって、あれよ、あれよという間にリキシヤに乗せられる。ホテルが決まっていけないのなら、ヤスイ——これは日本語。ヤスイの日本語は、われわれが顔を出すところではどこでも通じた。——ホテルを紹介してやる、と走り始めた。

大きな門と花の咲き乱れている立派な前庭のあるお屋敷風のところで降ろされる。もとマハラジャ（藩王）の屋敷で、この主人はマハラジャの末裔、つい最近ホテルに改造した、と説明を受ける。オーケ、オーケ、リキシヤマン。ありがとう。シャワーは温水が出

るし石鹼もトイレットペーパーもある。ベッドは英国王朝風で部屋の天井は高い。そこには、三枚羽根の大きな扇風機がある。

リキシヤマンが、夕方のガートもぜひ見ておくべきだというので、四時すぎ、聖なるガンジス河岸のガート見物に行く。ガートというのは、寺院や巡礼宿から河の中に降りていくための石段である。

ゴタゴタした街の中を抜け、ガンガー（聖なるガンジス河）の上までくる。何段もの石段を下りて河岸に行くと、ちょうど河を見下ろすところに、突然出た。

ヒンズー教の人たちは、ここで沐浴することを無上の願いとしている、という。夕方のガートには、人影はまばらだった。死体を焼く火が、あちこちに見える。高く積まれた薪の山。

外国からの観光客は、ベナレスのガートに、宗教的、形而上学的な期待を持って訪れる。私にはそれがなかった。

人を火葬にすること、あるいは焼かずに生の死体をそのまま流すこと、そして無数の骨と灰が生命体であることから解き放たれてこの河からどこかに出て行ったであろうこと、それらは特にベナレスの聖なるガンジスだけのことでない。どこでもいつでも、この地上

では今まで繰り返され、これからもそうなっていくこと、それだけのこと。私にはベナレスのガートでのことに、特別の意味合いをかぶせる気持ちは少しもなかった。

この地上には、生者よりも死者が多いこと、最も懐かしいのは死んでしまった人であることなどは私が日本にいる時からすでに、私に親しい事柄だったし、今ベナレスに来てもそれは変わらなかった。

ボートを漕ぐ人が、ガンガーは温かいからためしてみろ、と言うので、ボートのへりから手を河につける。それは、思っていた以上の温かさだった。河の流れは、非常に遅く、ボートはガートに沿ってゆっくりと上って行く。

河岸のガートの上の寺院が、夕闇の中に静かに沈みかけていた。

〈ベナレス二日目〉

ガンガーの沐浴は早朝が一番賑わうというので、朝食前にまた出かけて行く。街路から石段を下りて河岸までは二十メートルぐらいだろう。

昨年の夏、ガンガーは氾濫し、ガートを浸して街の高さまで水が上がったという。河底の骨と灰は、海にいつてしまったのだろう。

われわれは河を見下ろす街の外れに立って、向こう岸遙か彼方の地平線から今しがた昇つたばかりの太陽を見る。

ガンガールの向こう岸は不毛不浄の地で人は渡っていかない。河幅は一キロたらず。思っていたほど広くない。河を往復するのは向こう岸から砂を運んでくる舟だけだ。

こちらに着いた砂運搬船から上の街並みの高さまで、人は頭に籠を載せてそれで砂を運び上げる。頭の籠いっぱい砂を、二十メートルの高さまで上げて、一回六パイサ。百回運ぶと六ルピー（百五十円）になる。

われわれは昨日と同じ舟に乗ってまたガートの見物に出る。われわれは見物者。金のあゝる外国の見物者。

ナマの死体と、死者の灰と、その他もろもろの流入物の受け入れ先である聖なるガンジスでは、サリーを洗濯する人、沐浴する人、水を口に含む人、祈る人、黙想する人みんなそれぞれやることをやっている。われわれは写真をとる。死体を焼いているところだけとはるな、とポートマンに教えられる。

ボートの近くに白っぽい塊が浮いていたので、何かと尋ねたら、牛の死体デットボデーだろうと言う。そして、一日数百の火葬が行われる。

ベナレスのガートのあるところは、河の流れに沿って3キロ程にすぎない。そこに世界中の病める魂が見物にくる、といったところだろうか。

ベナレスから次の目的地ガヤマまでは、二百キロ足らず。予約なしで行きましょう。なんとかなるだろうと最低クラスの二等切符を買う。インド国鉄は、運賃のランクが五段階あって、最低と最上では百倍の開きがある。

夕方、ホームは列車を待つ人で溢れていた。みんな大きな荷物を二つ四つと持っている。これはインドの普通の旅行スタイルだ。毛布にくるまってホームに寝ている人もいるので、迂濶に歩けない。

定刻より一時間遅れて列車が入ってきた。先頭は一等コンパートメント。長い列車がゆつくりとホームに滑り込む。コンパートメントの後は、二等寝台。そのうしろに二等普通車両。

われわれは、度肝を抜かれた。車両は人だらけなのだ。屋根の上、ジョイントのところ、デッキは言うまでもない、もう人、人、人。昭和二十年代初期のあの混雑が、今、目の前で展開されている。ホームに溢れるばかりにいた人は、全部乗り込むに違いないし、客車の中いっぱいの人はどうにかして降りてくるに違いない。泣き叫ぶ子供、大きな荷物を抱え

て車両に突っ込んでいく人。われわれは二等切符を握りしめて、前方の一等コンパートメントに走っていった。

ブツダガヤへ

〈ベナレスからガヤへ〉

一等コンパートメント。人が通れる程度の通路を片側に通して、独立した部屋が並んでいる。われわれ四人は小さくなつて廊下に身を潜めていた。発車間際突然、すぐ近くで、罵り合う声が出たかと思つたら、取っ組み合いの喧嘩が始まった。七、八人の集団が狭い廊下で、あらん限りの声を張り上げて、お互い猛烈に怒り狂っている。乱闘寸前。

だが、

「ポリス、ポリス！」

と叫んだ。カーキ色のポリスが棍棒を持って入ってきた。どうやら原因は、二等の切符でこんなところにいるのはけしからん、ということらしい。われわれ四人は二等の最低

の切符だ。

ポリスが入ったことで、騒ぎは収まり、列車はベナレス駅を離れた。夕方のベナレスの街に煙ったような薄い霧が立ちこめる。デリーでも夕方になるとそうだった。あれは、夕餉の煙なのか。すべてがぼんやりしている。

駅を出てすぐ、列車はガンジス河の鉄橋を渡り始めた。ちょうど、河の上に乗弦の月がかかった。水に写った月がわれわれを追ってくる。ガートも霧の中でおぼろげな輪郭で並んでいる。単調な響きを繰り返し、列車は鉄橋を渡った。

さらば、ベナレス。

四人とも、黙って遠ざかるベナレスを眺めていた。

しかしいつまでもそうはしておれない。われわれには二等切符しかないのだ。インディラ・ガンジー首相の時は、無賃乗車は直ちに降ろされたという。デサイさんは大丈夫か。

四人は、窓に顔を付けて遠慮気味に廊下に並んでいた。

車掌が回ってきた。

「シヨーム、チケット（切符！）」

私は四人の先頭にいたので

「アイゴーツーガヤ（ガヤに行くんや）」

と叫ぶ。

変な返事だが、どうしようもなかった。車掌は切符を見ずに

「オーケー」

コンパートメントに入っておれ、と言う。四人は、ほぼ満席のコンパートメントに入る。しかし不安は去らない。いつ一斉検札があるかわからない。一生懸命英作文を始めた。

「われわれはどうしてもガヤに行かなければなりません。しかし時間がなく、やむなく二等の切符で乗りました。一等との差額は払いますから、どうかガヤまで乗せて下さい」

しかし、何事も起こらず、無事ガヤに着く。夜の十時半。

腹ペコなので、駅前の食堂にとび込む。もう夜も遅い時間なのに、食堂には人がいるし、駅前も昼間と錯覚するぐらい、人影が多い。ついにガヤまで来た。ブツダガヤまで、あと数十キロと迫った。

もう英語は通じない。A嬢のヒンデイ語で注文した定食は全くインド・スタイル。四人はカレーを飯にかけて、指でつまんで食べた。

〈ガヤからブツダガヤへ〉

食堂を出て、ホテルまで歩く。夜の十時をまわっているのに、人の賑いは、いっこうに衰えた様子がない。薄暗い街路をわずかに明るくしているのは、食べ物売っている店の明かりで、そこだけ人の顔がわかる。

初めてのしかも夜の街だが、不安感は少しもない。闇の中から、身体の輪郭しか定かでない無数の人が、次から次と現れてくる。インドのどの街でも出会ったこれらの人込み、われわれも紛れ込む。

今夜の宿は、ガイドブックに〈ガヤでは、次のホテルが安くいいところですよ〉と紹介してあった「アジッタホテル」だ。一泊七ルピー。全盲の青年が受付にいた。

コンクリートの床にベッドだけの部屋だが、クッションは良さそうだし、壁が厚いので私にはいい部屋だ。シャワー（水だけ）もトイレも共同になっていて、廊下を少し行った所にある。もう一ルピー出すと、毛布を借りることができる。ベッドの四すみに、三センチ角で高さ一メートルぐらいの棒が立っていたので、シーツの上に置いてあった蚊帳をこの四本の棒に掛けて、寝る。

今夜は、十二月三十一日。日本の年末は商業的で人為的に過ぎ、いつも苦々しく思ってい

だが、本年の大晦日はインドの夜だ。同じように一日が終わり、朝が来る。

ブツダガヤはガヤの南十三キロの所にある。舗装された道が一本、ナイランジヤナ尼連禪河に沿って、

真つ直ぐに延びている。

われわれ四人は、珍しさも手伝って、馬車に乗る。一本道を馬車に揺られて、抜けるような青空の下に行く。

途中の農村では、有史以来同じでないかと思われる農法で、畑を耕したり、取り入れ（サトウキビだろう）を行ったりしている。

馬車を見つけた子供が「バクシーシー、バクシーシー」と、手を差し出して追いかけてきた。われわれはそれを馬車から見下ろす。バクシーシーは金を要求する時のことばで、どこでもよく耳にした。

一人落ち、二人落ちとだんだん子供の数は減ってきたが、それでもバクシーシー、バクシーシーと、まるで調子を取るように息をはずませながら付いてくる子がいる。

後に乗っていた二人が、我慢出来ず、五十パイサずつ与える。子供はそれで、もう知らん顔。

三日後、私はガヤに向かってこの同じ道を一人で歩いた。われわれが金を与えたちよう

どその子供らが、むここの畑で仲間と遊んでいたが、リュックを担いで歩いていた私には、全く無関心だった。

ガヤまでの三時間、別の村では遠くから大きな声で「ナマステー」と声をかけてくる子もいた。歩いている私に、バクシーシーと言って寄ってくる子は、一人もいなかった。

ブッダガヤの大塔が見え始めた。ゴータマ・ブッダの成道を記念して、アシヨカ王が創建したもので、何回もの改修を経て現在にいたっているという。

サマンバヤ・アシユラム

〈ブッダガヤ〉

ブッダガヤに着く。ゴータマ・ブッダが成道した所。当時の大菩提樹も金剛座も残っていると聞いていた。ここに来ることが今回のインド旅行の目的のひとつになっていた。

生身のゴータマを思い浮かべる。難行苦行は悟りへの道でないと知ったゴータマが、乙

女スジャータのさきげる乳粥を食べる。尼連禪河で沐浴の後、最後の瞑想に入る。

尼連禪河は、ガヤからの道と並行して流れていた河だし、スジャータの家は、この河の向岸にあるという。

しかし、インドの現実はそのようなものなど、吹き飛ばしてしまう。ブツダガヤは、大塔を中心にした一大観光地だ。

日本語がペラペラの十四、五歳ぐらいの子供がわんさといて我々日本人観光客を見ると、土産品はどうかと、盛んに話しかけてくる。外国で聞く外人の日本語は、それがうまいほど耳にまとわりついてくるのだ。

ブツダガヤは小さい田舎なので、彼らから逃れるのは容易なことでない、仲間同士の話も全てわかるのだろう。うっかり変なことも言えない。

「まいった まいった」

と、つぶやいていたら

「もっとまいることがありますよ」

などと言うのだから。

インドの物価は安く、日本円に換算して考えると、なんでも超破格値に思えて来て、売

り手の言い値どりで買うことが多い。特にここブッダガヤは、感激してやって来た日本人の団体が、大量の金を落としていくので、結果的に周りの物価を上げていると土地の人が半ば迷惑気味に説明してくれた。そして、決してここで買物をしてはいけませんと。

五十パイサの拝観料を払って大塔を中心とした寺院跡を見る。入口で靴を脱ぐ。寺院に入る時、靴を脱ぐのは、インドでは普通のことだった。靴下ははいたままで。

なかは大塔の周りを巡る人でとてもぎわっている。インド人の団体、家族旅行の人、我々日本人そっくりのチベットの僧。彼らは、五体投地の礼拝を何回となく繰り返ししている。

ゴータマ・ブッダがその下で座ったという大菩提樹はたしかにあった。幾重にも枝を茂らせその下に涼しげな木影をつくっていた。花が供えられ、すぐそばで同じように座っている人がいた。しかし、私にはあつけない会合だった。

百万巻の経典を生み、岩に像を刻み、そして幾多の偉大な思想家の智慧の泉となった、それら尽きることのないエネルギーの源、その点、大菩提樹のその点から……。

そんなふうな空想は、昼間のインドの空のもとでは、どうもふさわしくない。喧噪と饒舌は、ブッダガヤの大塔の周りでも変わりなかった。賑かに、楽しく、人は大塔のまわり

を巡る。

しかし、ここブッダガヤで、インドの伝統的な深い確かな智慧を知る機会も得ることが出来た。それについて、私はぜひ語らねばならない。

〈サマンバヤ・アシユラム〉

ブッダガヤでの宿は決まっていなかった。土産品売り屋の客引きのしつっこさにいささかうんざりしていたので、A嬢がサマンバヤ・アシユラムに宿を頼んであげるから、一緒に来ませんかと言った時には、われわれ男三人は、もう彼女の後について歩いていった。

サマンバヤは融合、アシユラムは道場の意味である。マハトマガンデーの非暴力・不服従の思想をよりどころとして、教育による革命運動（これはこの創設者であり現在も子供らを導いているドアルコさんの言葉）を實踐している私塾と言えば、その概要を説明したことになるだろう。

サマンバヤ・アシユラムは、ブッダガヤの大通りからすこし入ったところにあった。

ここでは、家族から離れた十歳前後の子供十五〜二十人が寄宿生活をして勉強している。彼らはすべてアウトカーストの子だという。インドではアウトカーストは不可触賤民と

して侮られ、ひどい時は人間扱いを受けない。

ガンディーは、アウトカーストの子こそハリジャン（神の子）であると規定した。

ドアルコさんは、ガンディーの高弟ビノーバから直接教えを受けた人で現在五十六歳。

少し白いものの混じった五分刈りの頭、穏やかな表情で語られる言葉は静かでよどむことなく、あるいはときに情熱的であった。

ここのアシラムを含め、五つのアシラムが別の所にありそれらの経済的基盤は世界各地にいる里親から送られてくる資金に頼っている。A嬢は、里親になっている彼女の友人から、この資金を預かってきていたのだった。

われわれは、三度の食事をいただき、ベッドを与えられ、二晩泊めていただいた。食事は、野菜が主で、今度の旅行中一番おいしかった。

夜、ドアルコさんは、われわれと、それに偶然一緒になった日本からの訪問者（彼らにはヒンディ語に練達したベナレス大学の日本人学生が同伴していたので彼の通訳で話を聞いた）を前にして、アシラムのこれまでの生い立ち、教育方針、具体的な例など語って下された。

ひとつの抽象的な命題をまず出して、その後、延々と続く具体的な生き生きとした場面

の数々、豊かな比喩。私は大乘經典の語り口を思い出していた。それはとどまることを知らないかのように続いた。

「人の心に食い入るのは、人を変えるのは、愛であり教育である。教育こそ唯一の方法である」 その声は、アシユラムの石の床と高いコンクリートの天井の間でこだまし、そして私には、ここから世界中に響いていくように聞こえた。

インド各地で見た街の雑踏、貧困、騒々しさ、私はそれらをドアルコさんの言葉に重ねていた。

娘二人つれて



歩道を牛がいく(カルカッタ・マイダン公園近く)



バスは終日満員、これは朝です(カルカッタ)



サトウキビのジュース屋、手前のコップに汁を受ける(カルカッタ)



太陽寺院の石の交歓像は丸くて小さかった(コナラーク)

安いチケットがルートを決めた

ここ六・七年間、私は二週間から二十日程度の小さい外国旅行をくりかえしてきた。そこで学んだことは、日本を離れることの解放感と、いわゆる国際感覚とであった。短かい旅をくりかえして私が出した結論は、民族や国家や言語が異なることで人々が異っている程度は、同一民族、あるいは国家の中で人々が異っている程度と同じである、ということであった。つまり、どこに行っても変った人はいるし、理解を越えた人はいるし、また、私と（したがって、あなたと）同じ心情の人もいる、ということである。

この結論は、旅をする上のひとつの大切なコツのように思える。人を人たらしめている心的全的ななにかの基本のところは、世界共通で、その芯コアのまわりに歴史的文化的なものがかぶさっている。必要なのは、人の心と心とは必ず呼応しうることを保証するコアの汎世界性と、その外に付着している歴史的な遺産である精神の瘡蓋とをいつも明確に区別しておくことだ、と理解するようにしたのである。私は、どんな文化的歴史的背景をもった人に会っても、卑屈になることも尊大にかまえることもなくなった。もし、言葉

がわからなければ残念だし、申し分けないし、深く相手を理解することはできないが、しかし、それは、反省することであつてもなんら劣等感にさいなまれることではない。言葉が通じなければ、そのときは、スマイルあんどハートでなんとかなる、とひらきなおつて許してもらえばよい。

この感覚は、日本のおかれた状況を考えると今後増々重要になってくるので、子供たちにも早くから身につけておいて欲しい、と父たる私は思い込んで、実行にうつすことになつた次第である。

それが、小六と小四のへ娘二人を連れて、インドへである。

いままでの一人旅とちがつて、娘二人がいるので、衛生や治安上のことを考えるとあまりひどい宿には泊まれない。しかし、予算は限られている。そこで、大阪からインドを往復する最も安い航空券をと求めたのが、大阪ーバンコク（大韓航空）バンコク泊。バンコクーダッカ、ダッカ泊、ダッカーカルカッタ（いずれも、バングラデイツシュ航空）のルートであった。大人十五万円、子供十三万円。ダッカでの宿泊代は、食事も付いてチケットの中に全て含まれているので、バンコクのホテル代がかかるとしても、他のチケットと比べものにならないくらい安い。それに、初めて外国に行く娘たちにとって、いろんな国

を見るのはおもしろかろうと、早朝の大阪国際空港から尾翼が水色に赤と青のデンデン太鼓のマークの大韓航空のエアバス三〇〇に乗り込む。

夏の日射しのなか、われわれの飛行機は、青空のなかに昇っていったが、下の娘が、激しい飛行機酔いにみまわれた。

下の娘を座席後部にある洗面所に連れていき、のどに指をつっこむように言い、無理に吐かせる。飛行機に乗る前に飲んだ、クリームソーダのグリーンのソーダ水と、氷とがそのまま出てきたので、すっかりびっくりする。「腹が冷える」という言い方はきいたことがあるが、文字どおり氷がそのまま出てきたのである。娘は吐いてすこし楽になったようだ。

乗務員の人からもらった薬は、正露丸によく似ていたが、あれよりもっと刺戟臭があり、そのにおいを鼻にしたらだけで胃腸がたちどころにスッキリするほどであった。実際、本当によく効いた。

台北で、七四七ジャンボ機に乗りかえる。娘二人は、窓の外に雲に見とれている。あとで聞くと、たいへん感動したらしい。大阪へ台北もそうであったが、台北へバンコクも満員である。日本の団体客はそう多くない。

飛行機が水平飛行に入ると、機長から、バンコクの気象状況、現地到着時刻（現地時間）がアナウンスされる。まず韓国語、ついで英語、最後に日本語であった。私は、デジタル時計の数値を二時間あともどりさせる。地球規模で移動する時の、いつも不思議な想いにさせられる、この時差の調整。

バンコクの空港に着く。「カムスハムンダ」と私はあいさつして、トラップを下りる。思っていたほど暑くはない。バスで空港ビルまではこぼれて、タイの入国手続きをする。「ヨーロッパから日本にむかって帰ってくる人は、タイのあたりまで来てわれわれの顔と同類の顔に出会いホッとする」と何かで読んだことがあるが、出ていく側から言えば、まだわれわれの延長線上にある仲間の顔である。今回の旅の目的のひとつに、常日頃から親しんでいる顔とは全くちがった顔の人のところにいきたい、というのがあったので、（娘たちは、そう言った）もうすこし西に進まねばならない。それがインドであった。

空港からホテルまでは、タイ航空のトヨタラウン・リムジンで、約三十分くらいだった。部屋に着くとすぐに、洗濯のロープをひっかけるのに適当なフックをさがし、部屋いっぱいロープを張る。そして、洗濯。これが、これからの日課となる。われわれの泊ったホテルは、ガイド誌には、一流にランクされていた。お湯の出るバスタブ、ひろい部屋、

冷蔵庫に、テレビ（テレビをつけたら、「パーマン」をタイの言葉に吹きかえてやっていた。テーマソングは日本語のままです）、そこに三つベットを入れて、八五〇〇円。一人二五〇〇円である。一流のホテルの部屋に洗濯物がいっぱいぶらさがり、そうじにきた人はどう思ったことか。

おいしいものを食べさせる、と出る前に約束していたので、ホテルの人にチャイニーズレストランをきいて、夜の街に出る。走っている車のほとんどが日本車である。歩道には食物の屋台が多く、揚げものをしている。薫製の肉もぶらさがっている。もちろん、食欲をそそるとてもよいにおいである。

われわれはアジアの民

ホテルの人からきいた中華料理店は、すぐに見つかったが、すでに満員である。地元の人よりもヨーロッパや日本の旅行者の方がはるかに多い。小綺麗な、旅行者の多い店は、

値段が高いのが常識で、味についてはどこもかわらない（どこもとてもおいしい、というレベルで同じ）というのが、これまで韓国とマレーシアを旅して得た私の知識だが、タイにも多分あてはまるだろう。われわれ三人は、道路までテーブルを出している、あまりこみあつていない店に入る。

店先に生きたままの蟹がハサミと足を縛られて積みあげられている。エビとイカは氷の中に埋っており、豚は目下焼き上げ中である。メニューは写真付きで漢字の表示もあるのだ、子供にもとてもわかりやすい。私は何はともあれまずビール。蟹とエビとごはんを注文すると日本語で

「野菜は？」

「イカのバーベキューおいしい」

とかえってきたので、なるほどと納得して、野菜を二皿、イカを一皿追加する。野菜は、日本の野菜いため風だが、あれより油気が少なく、お汁がたっぷり、一口くちコーン、セロリ、さやえんどう、ホウレン草、モヤシなど見た目もきれいで、味はいうまでもない。蟹とエビは蒸したものに薬味のソースが二種類。イカは醤油焼であった。子供たちは出てくるものすべてがおいしく、私も食べるとは、こういう行為であると、ビールが舌を

なめらかにし、ひと講釈する。平和で楽しい夜であった。十日あまりあと、またこの同じ店に入ったが、むこうが覚えてくれていて、「やあ」と声をかけてくれたのが、とてもうれしかった。

翌日、舟に乗って水上マーケットを見物。二十名足らずの観光客から、フランス語、英語、イタリア語が聞かれる。バンコクは、クロンと呼ばれる生活路としての水路が発達しているが、そこを観光客を乗せたランチが走りまわり、その波が、日用品を運搬している手漕の子舟や高床家屋の柱におしよせる。人々は、今でも、クロンで口を滌ぎ顔を洗い身体を洗いそして洗濯する。水路の水は、淡い暗い草色を呈しているので、この説明をきいてイタリアの老婦人は顔をしかめていた。しかし、東南アジアに来るとかつての日本と重なるところが多く、われわれも川で洗濯したし、小川の水を炊事にも使った。それもそう昔のことでないのだ、と思うと、やはりここはアジアなのだと思う。

終日ガイドとして同行してくれたタイの女性に、もしこの質問が無礼なら許してほしいが、われわれにはチップの習慣がないのでと前置きして、チップの相場はいくらくらいかと尋ねる。

「それには答えられません」

「もし、お気にめしたのならそうされればいいし……。ただ時々、ヨーロッパの人を案内して全くおもしろくなかったのでチップを出さない、と言われることがあるが、これはアジアスタイルではないですね」

たしかに、（アジアスタイル）と呼んで括れるものはある。身内意識みたいなものに近い。ヨーロッパからの旅行者がアジアのきたなさに顔をしかめるとき、私は、少々反発したくなるのを抑えがたくなる。妙な気分である。

日本を出て二日たった。娘たちは、外国に入国する時には荷物の検査を受けなければならぬこと、その際パスポートが無くてはならないものであること、そして、それぞれの国にそれぞれの通貨があること等を理解してきた。バンコクを夕方出たバングラディッシュ航空（ビマン）のボーイング七〇七はダッカに十時に着く。ここまで来ると、日本との時差は三時間。時計をさらに一時間遅らせる。

ダッカでは、われわれは通過旅行者トランジットパッセンジャーなので、入国手続き抜きで空港を出て航空会社のバスに向う。乗り継ぎ時間が長いので、いったん街に出てホテルに休んでもらおうという計らいである。午前零時をまわっているのに、幼ない子を抱いた母親や、すこし大きくなっ

た上半身裸の子供らが、「ワンドラー」と手を突き出してバスの周りを取り囲んでいる。バスの入口に群っている子供を分けて中に入る。バンコクでは見られなかったことである。ビマンの準備してくれたホテルは一流であった。お湯の出るバスタブ、クーラーの効いた部屋、もし、いそぎの旅でないのなら、バングラデイツシュ航空のこの乗り継ぎ方法は素晴らしいものである。航空料金のなかに、ホテルの宿泊代や食事代がすべて含まれているのだから。

朝食をすませて再び空港に向う。夜移動した時は気が付かなかったが、ダッカは整然とした清潔な街である。満艦飾のリキシヤが何十台と走り、そのそばを日本車が駆け抜ける。色とりどりのリキシヤが車道を埋め尽して走る様は壮観である。朝の通勤時のあわただしいエネルギーはどこもかわらない。

所用実時間四十五分でカルカッタのダムダム国際空港に着く。バングラデイツシュとカルカッタとは三十分の時差があるので、飛行機は十五分でインドに着いたことになる。六年ぶりのカルカッタだ。

入国の手続きをすませて、私と娘二人とがそれぞれ自分の荷物をもって歩きはじめると、たちまちタクシーの客引きにつかまる。宿泊所は、私が六年前に泊ったと同じところを日

本を出る前に予約してある。

「どこへ、ホテルは予約済みか？」

「ゴルフパークのラーマクリシュナミッション。いくら？」

と私。

「一五〇ルピー！」

「まさか、一〇〇ルピー！」

「だんな、まさか、一三〇ルピー！」

「一一〇ルピー！」

「オーケー、だんな、一二〇ルピー！」

タクシーの客引きは、商談が成立したと判断し荷物をつかんでタクシーまで運んでしまふ。いつもこれだ。こちらがいいかげん面倒になってきたのが、どうやらわかるらしい。円に換算して、一五〇〇円である。カルカッタの市街地域までは三十分以上かかるし、日本の感覚では安い、それに早く宿に入ってシャワーをかぶりたい。

帰り、日本人の友人がタクシーの運転手と交渉して決めてくれた値段は、五〇ルピーだった。これくらいが相場らしい。

世界最悪の都市に向ってタクシーは走る。

娘二人のはじめてのインド

空港から市街地に入る手前に、泥や藁の家に住む人たちの想像を絶するスラムがあった。六年前はじめてそれを見た時、土の中から人が出てきた、と思った。泥と人の区別がつかねる、ようにも思った。

今は目にするものに何のショックもない。何故かと考えはじめたが、そんな思考は続かなかった。青い空と、時々車の窓をかすめて去っていく牛の群れに目をやる。娘二人は窓にへばりつくようにして外を眺めている。

宿に入り、例のごとく、シャワー、洗濯。宿泊代は、三食にモーニングティーとアフタヌーンティーが付いて一人、一〇〇ルピー（約二三〇〇円）である。六年前にはなかったロールペーパーもある。

荷物を整理していて、未使用のカラースライドフィルム七本が全て無いのに気付いた。中型の南京錠も、箱だけ残して鍵本体がない。鍵のない錠の箱は、笑い話にもならない。バンコクからカルカッタに荷物を送る途中、施錠するのを忘れ、その間にやられたらしい。バカチョンと三十五ミリカメラの二台もつてきており、バカチョンの方は子供らに勝手に写してもよい、と言つてあつたので、二人のフィルムのなくなつたショックは大きい。特に下の娘はどんな時にもカバンから目を離さず、時々私に注意したくらいだから、その落胆は見えておられないほどであつた。こちらのミスなので謝るしかない。バンコクは、それほど安全でないと聞いてきたのを、あらためて思い出す。

宿にしているラーマクリシユナ・ミツシヨンは、カルカッタの南にあり、市の中心地であるマイダン公園やチョーリング通りへは、バスで二十分くらいのところである。ここからなら私はバスにも乗れる。また、このあたりならレストランや銀行も知っている。

おいしいラッシーを飲ませてくれる店に二人を案内する。ラッシーは、牛乳とヨーグルトをまぜてよく冷やし、甘くした飲みものである。六年前、暑さに疲れはてた時、何度もこの店に来て、ラッシーのおかげで元気をとりもどしたのを思い出す。店内はぶ厚いカーテンで遮光し、クーラーが効いている。私は二人に、「おいしいか」と尋ねると、「うん」

と大きな返事がかえってくる。ラッシーとレモンソーダと、ミルクと砂糖のたっぷり入ったティー。これら三つがインド滞在中のわれわれの活性剤であった。ラッシーは店によって微妙に味が違ったが、どこのもおいしかった。

カルカッタにきて二日程たってから娘二人がメモをしたカルカッタの印象を羅列する。

- ① インド人の目、とてもこわい。
- ② カルカッタの空気はきたない。
- ③ ホテルのスイーパー（掃除人）やルームボーイは、はだし。
- ④ きれいな所と、きたない所と、すごい差がある。
- ⑤ カルカッタの水はまずい。
- ⑥ 子供は、だいたいはだか。
- ⑦ きたない水が道のわきからわき出ている。その水で身体をながしている。
- ⑧ タクシーにクーラーがない。
- ⑨ 人力車がある。自転車で動かすのと、人で動かすのと二つある。
- ⑩ お母さんに、あいたくなつた。

あとすこし子供たちのメモを続ける。

- ⑪ だいたい同じ時間に雨が降り、停電になる（注、雨と停電は関係なく、雨期の定期的な雨とそれと独立の夕方の停電とである）
- ⑫ 道に牛がいる。壁に牛の糞が乾かしてある。
- ⑬ 女の人は、だいたい髪が長く、みんなサリーを着ている。
- ⑭ サリーはとてもきれい。
- ⑮ 黒いインド人と黒くないインド人がいる。

カルカッタのきたなさは、六年前とくらべひどくなつたとは思わなかつたが、空気のごれは、とても悪くなつていた。それは、自動車の排気ガスに依るもので、特にディーゼルエンジンのそれは劣悪で、タクシーに乗っていて、追い越していったバスの排気ガスを窓ごしにもろにかぶつた時などは、息がつまりそうになる。幹線道路の交通渋滞は慢性的で、スムーズに進まないのに加え、朝夕のラッシュ時のバスの混み具合は東京の国電なみなので、そんな時に乗り合せでもしたら、排気ガスと人いきれと暑さとで疲れはててしまふ。

それでも、これから旅をすすめていく上で必要なことだけはやらなければならぬ。

すこし時間をずらして市の中心部に出る。必要なこととは、これからの目的地であるプーリーまでの列車の予約と、帰りの飛行機の再確認とである。

市電の方が歩かなくともよい、という友人のすすめで、電車を待つ。やってきた電車のあまりの混みように尻ごみしていると、彼は

「乗っちゃって下さい」

とわれわれ三人を促すので、それは、いくら待っても同じようなものですよ、というふうに理解できたので、まず子供二人を押し込んで、私はなんとかデッキに足をかける。こ

の暑さはたまらんと、ちゅうちょしていたのでは落ちる危険性があるので、強引に身体を入れる。下りる人がいないのに、どンドン乗り込んでくる。子供たちとは、だんだん離れていき、いつの間にか姿を見失ってしまった。二人でいるのだから大丈夫だろう、それにインドの人は親切だしと安心していたら、案の定、二人とも座席に腰かけていた。

私の横に立っていた青年に

「ウェアカムフロム」

と話しかけられ、例によって私は簡単な自己紹介をする。彼の英語にインド人特有の訛りがないので、インドの人かと尋ねるとイラン人だという。ただし、親がイランからやって来て、自分はカルカタで生まれ、今、医学生でイランには行ったことがない、と今度はむこうの自己紹介となる。この親切な青年がわれわれを列車予約の窓口まで連れていってくれたので、明日の夜出る列車の切符を手に入れることができた。礼を言うと、彼は、「マイプレジャ」とだけ言って、首をほんのすこし傾むけ、去っていった。

そのあと、バングラディッシュ航空で、チケットの再確認。この二つの仕事で一日が終る。

プリーレへ、一等コンパートメント

インドで列車を予約するのが面倒なのは、当日切符がないことと、予約の切符売場が駅でないことによる。尤も、小さな駅なら構内にそのため事務所はあるが。はじめての大きな都市で、鉄道の予約センターをさがすのはけっこうたいへんである。インドの鉄道の予約は、日本のようにコンピュータを用いた作業でないので、ここで簡単に紹介したい。

最初に予約センターの窓口で受け取る切符には、表に使用月日と列車名が、裏には氏名、年令、性別がそれぞれ手で書かれている。この切符をしっかりと握り締めて翌日駅にいくと、出発一時間前ぐらいに、その列車の予約席の一覧表がプラットフォームの掲示板に張り出される。それには、車両番号毎に、氏名、年令、性別のあとに予約座席番号がタイプされているので、自分の名前があることを確認して、指定の車両に向う。そこでもまた入口に、その車両だけの予約一覧表があり、そこに自分の名前を見つけて一連の列車予約席乗り込みのプロセスが完了する。

われわれが入った一等寝台のコンパートメントには、上下二段のベットがそれぞれ進行

方向に直角にむかい合っており、定員は四名で、扇風機が四ヶ、天井に取り付けてあった。窓には鉄格子がはまっている。外からの侵入を防ぐためのものである。ベットにはすこしだけほこりが付いていたし、金属の部分は塗装が浮いてサビが出ていた。古い古い車両である。

ハウラ駅二十二時四十五分発のプーリ行き急行は、静かにホームを離れていった。外は深い夜の帷のなかにある。娘二人らは横になるとすぐ寝入ってしまった。彼女らはどこでもよく眠る。私は窓ぎわの小さなテーブルの上で、旅のメモをとる。私は、どこかの街を列車が出ていく、その感傷を楽しむ。私の時間が流れる。

夕闇せまるカルカッタの大通りで、タクシーがなかなかつかまらなかった時（まず行き先を言っただけで断られる。オーケになっても値段が折合わない。そのうち空のタクシーが見付からなくなり、埃と暑気と喧嘩のなか、二人の手を引いて車の波の間を渡る。またタクシーをさがす）、上の娘は、私に言った。

「旅って、冒険みたいだ」

そう、これが旅のおもしろさ。まあ、こっちはけっこう疲れるのだけれど。

プーリー十時着。プーリーはカルカッタの南五〇〇キロメートル、人口十万人ほどのべ

ンガル湾に面した小都市である。ここはヒンズー教の四大聖地のひとつで、六月におこなわれるヒンズー教の祭りには、インド各地から大勢の人が集まる。われわれの目的は、この地のヒンディーの寺院をみることに、ここから東へ三十五キロメートル離れたコナラークのスーリヤ寺院をみることである。

列車から足を下すか下さないうちに、リキシヤマンに荷物を掴まれ、

「どこにいく」

「ホテルはどこだ」

と矢つぎ早やにたたみかけられる。ホテルは予約済みだと、本当はしていなかったが、ふり切つて、外に出る。また同じことがくりかえされる。

「ともだち、どこにいく」

どこにいつてもこれである。

二台のリキシヤに分乗してホテルまで十ルピー（一四〇円）で話がついて、サウス・ウエスタン・レールウェイホテルに向う。

サウス・レイル・ウェイ・ホテルは、カルカッタの友人にすすめられたホテルで、食事がとてもよい、という。今回の旅は、宿についてはある程度の贅沢は予算の中に入ってい

たので、プリーでは三指に入るホテルに迷わず直行となる。贅沢といつても、それは、部屋にバスとトイレがあり、ホテル内で食事がとれるといった程度のことなのだ。

八月は旅行シーズンでないので、英国風の大きなホテルは、からっぽに近い状態であった。娘二人と私とで一部屋、部屋にはお湯が出るバスタブがあり、三食^{プラス}十^{プラス}ティータム二回、空調設備はないが、確実にまわる大きなプロペラが天井にあるから、われわれは部屋をみせてもらって、すぐにオーケーをする。三人で一日四〇〇ルピーであった。

昨日の朝、プリー三日間の旅行用の荷物を持ってカルカッタの宿を出たあと、カーリーテンブル・インディアン・ミュージアムとまわり、夜行列車に一〇時間あまりゆられたので、身体の疲れと汚れはかなりのものである。インドにきてはじめて、バスタブにいったいのお湯をはり、まず私が身をしずめる。水をかぶつてもすこしも冷たくも寒くもないが、お湯の中での解放感には、およぶべくもない。金持ちの国から来た、金持ちの本国ではプチブルの、ひとときの贅沢であった。昼食は、白身の魚のフライ、これが最高であった。食後のケーキも特に美味であった。うまいものは、本当にありがたい。昼食をすませ、プリーの市内見物となる。

ホテルを出ると、すぐ、われわれを駅から運んでくれたさきほどのリキシヤマンにつか

かもしれない、とヒンディ
ホンやり考えていた。

の腹痛を訴える声に起こさ
下痢が始まり、はじめて
同じ症状があらわれ、頭も
頭に我慢して耐えていたが、
うしかないと決心する。
日本人旅行者を見舞ってい
にまず行って相談し、だれ

まる。三人で二台のリキ娘二人の乗ったリキシで、心配であつた。

広い長い通りの両側に巨大な高塔^{シカラ}が、逆光の中であつたが、われわれ異年と母、老いたサリーのく。彼らを呑み込んで去神とともにあるヒンデれかわるとされるヴィシ々に、自らの人生を重ね姿であるので、それを矛盾をその中に抱えたまの渾沌に打ちのめされ病インドの仏跡を歩く

か適当な医者を紹介してもらおうと、暑い日射しの中、痛みのおさまらない頭に白いタオルを被り、リキシヤに乗り込む。

妙法寺はすぐにわかつたが、日本人僧侶はあいにく他の寺に行った後で、ここには日本人は誰もいないという。寺の責任者にわれわれが病氣になつた事情を説明したところ、自分の友人が医者だから是非診てもらいなさい、病院はリキシヤマンに教えるから、あなたについてはいつしよにホテルに帰ればよい、心配することはない、と親切に言つて下さるので、ホテルを出るときからこうなつた以上もう任せるしかないと思つていたので、その人に丁寧に敬礼を述べて妙法寺を出る。

病院といつても平屋の奥行のあまりない小さな建物であつたが、入口の受付ふうのところに座つていた人が、われわれの医者であつた。入口付近の長椅子に五・六人の人が順番を待つており、病院独特の薬のにおいがした。リキシヤマンがその医者に向やうと、その人は傍の黒いカバンを取り上げ、すぐ行きましようといわれわれのリキシヤに乗り込んでくれた。浅黒い精悍な顔立ちの四〇才前後のお医者様である。私がたどどしい英語で症状を説明すると、ウンウンと頷き、

「ノープロブレム」

とだけおっしゃる。インドで注射をすると注射針から感染するときいていたので、

「注射は嫌いだからしないで下さい」

と頼むと、また、ウンウンと返事がかえってくる。

ホテルでは私が医者を連れて帰ってきたのでびっくりしていたが、早々に部屋に入ってもらい娘をみてもらう。検温。ほとんど平熱であった。私の番になる。華氏なので体温計の目盛は一〇〇度近くを指していたが、摂氏で三十八度ぐらいである。三十八度の熱で炎天下のインドを、リキシヤで走ったのだから、つらいのは当然である。聴診器をあて、丁寧に打診がくりかえされる。下痢の回数、腹痛と頭痛の程度などが問診であった。

すぐその場で処方箋を書いて、薬は医者もっていないからこの紙をもって薬局に行きなさい、決められたとおり飲めば直ります、と言って帰られた。往診料は五〇ルピーであった。

再び外に出る元気はなく、ルームボーイの人に頼んで薬局まで走ってもらう。もらった薬を言われたとおり飲んだら、ただちにききはじめ、猛烈な勢いで汗が出る。拭いても拭いてもおっつかないくらいである。健康なのは上の娘だけなので、洗濯を頼んでやってもらっていたが、乾く間もないのであとにはバスタオルを巻いてシャツ代りにする始末であ

った。

お昼前から薬を飲みはじめ、半日病氣と格闘していたら、夜には楽になってきた。偉大な薬だったと今でも思っている。私と下の娘とがダウンしたので、上の娘が一人でホテルの食事の下におりていった。

帰りの列車の予約が済んでいるので、プリーにいられるのは今日一日だけである。私も下の娘もなんとか旅行する馬力が出てきた。旅の最初の目的のひとつであったコナラークのスーリヤ寺院に向う。タクシーを借り切って、コナラーク往復二〇〇ルピーである。市街地を離れてすぐ、道の両側に畑が広がりはじめたとき、むこうから背に二人の人を乗せた象がやって来るのが目に入った。おでこに赤いペンキを塗った三メートル以上ありそうな大きな象である。多分、農作業に行くところなのだろう。すれ違う手前でタクシーを止めてながめていたら、背の一人が簡単な芸をさせ、ワンルピーとさげぶ。象の鼻が窓まで延びてきて、一ルピー貨をじょうずにつかんでもっていった。

プリーからコナラークへの道は、野を抜け、海岸に出、河口のいくつかの橋を渡り、また田の間を通ったかと思うと、突然、スーリヤ寺院に行き着いた。

スーリヤ寺院は、寺院全体が馬車に形どられており、中央の高塔はかつては六十メート

ル以上あったという。基台両側面に各十二個、計二十四個の車輪が寺院を支える形であり、それを率く七頭の馬もいる。これらは全て石に刻まれた一大彫刻群でもある。スーリヤ（太陽神）の名のとおり、昇る太陽（活動と希望）、昼空の太陽（憾怠）、沈む太陽（消沈と怒り）の三つの太陽が、人格神として、寺院正面の右、奥、および左の三方に、それぞれ刻まれている。

ここは、中世ヒンドゥー寺院の中でも最も有名な寺院のひとつであるのに、観光客はまばらであった。ひととおりまわり終ったころ、あたたかいインドの八月の雨が降ってきた。大きな木の下でしばらく雨が止むのを待っているとき、同じように雨宿りをしていたインド人家族とわれわれの目があつた。

わたしは、一瞬、われわれが日本のどこかいなかの、お宮さんの境内で雨をやりすぎしているような気がした。

十三世紀に建てられたこの巨大な石の彫刻の寺院は、太陽が馬車を駆って天空をまわるという観念からつくられたというが、今は潮風の風化にまかせそのままになっていた。そのまわりの観光客用の食堂とガイド、そしてインドのどこにでもいる乞食の姿だけが、この今のインドである。かつての彼らの太陽神は、今でも人々の心に生きているのか。遺跡

を見物に來ただけの私には、それは知るよしもなかつた。

わたしたちも



舟の家の横を観光船がいく(バンコク)



ただなんとなく、そこにいる人たちを街のいたるところで見た(カルカッタ)



ミニバスの発着場のひとつ、タクシーはすべて「アンバサダー」だった(カルカッタ)



リキシャマンと智子と由紀子、ベンガル湾の波が打ち寄せる(プーリー)

たいへんだった一日

私たちは、インドのプーリーという町のホテルに行きました。

その日、お父さんと智子（妹）といっしょに、バスで観光に行く予定で、おべんとうも用意して、それが部屋に来ていたのですが、お父さんと智子が、前の晩から体の調子が悪くなって、行けなくなりました。ここに来たのは、ほとんどがこの為だったので、行けなくなつてちからが抜けました。

でも、観光なんて行く余裕など、とてありませんでした。

朝、起きると、まだお父さんが寝ているので、「あれっ」と思いました。お父さんは、えらそーに寝ていて、智子もその横に寝ていました。

私も少しえらかったのですが、タオルを冷やしたりして忙しくて、寝ていられませんでした。それに、寝るとますますえらくなるようで、寝ませんでした。

前の晩は、智子の方がえらかったけれど、その日は、お父さんの方がえらそうでした。

智子は、だんだん良くなってきていたけど、（でもまだまだえらそう）お父さんはいっ

こうに良くならないので、この近くに日本人のお坊さんがいるので、その人に相談しよう
と人力車に乗って行きました。でも、おられませんでした。それで、そこにおられた人に
紹介されたお医者さんに見てもらいました。

聴診器をあて、熱を計ると智子は、平熱でしたが、お父さんは、三八度もありました。

そこで、ルームボーイさんに、薬を買いに行ってもらいました。そしてまた、その薬が、
ものすごくよく効いて、直りかけていた智子は、すぐ直ってきて、お父さんは、あせがふ
き出てきました。しかし、着替えがほとんどカルカッタに置いて来てあったので、すぐ着
る物がなくなりました。それで、その部屋の「バスタオル」を体に巻いていました。洗う
ひまなんかなく、だいたい乾いたらどんどん着て…と、やっているのです、服が臭くて、
なんかかわいそうでした。

そして二人とも、ほとんど直りました。

でも、夕食はまだ行かないと言うので、私一人で行くことになりました。

部屋を出て、階段を下りて、食堂につくと、部屋によって座るところが決まっているの
で、いつもと同じ所に座りました。

幸い他にだれもいなかったので、ほっとしました。

コップからナプキンを取って膝に掛けると、いつもどおり、すぐスープを持って来てくれました。

そして順々に、いろんな物が出てきました。

いつも智子とお父さんと一緒に三人で来るのに、今日は一人だったので、不思議に思っただけだが、昨日智子がおなかを痛がっていたのを知っていたボーイさんは、おなかをおさえていすを指さしたりしました。私は、なんのことか分っていたので、自分もおなかをおさえて、へんな顔をしました。あつちも、まだおなか痛くて来れないんだ、という事を分ってくれたようで、分ったというように事を言っていました。

私は、にこつと笑いました。（私は、この旅行中、言葉が通じないので、何でも笑っていました。）

そして食事も終わってデザートが来ました。ワイングラスの大きなような物に、フルーツポンチらしき物が入っていて、その上に、ビスケットのような物がのっていました。フルーツが付いていたんだけど、どうやって食べていいのか分からず、ビスケットの下からフルーツポンチを取ろうとしたけど、うまく行かず、じいーと見ていました。

そして、近くにいる給仕さんの方を、チラッ、チラッと見て、デザートを見ていたのだ

けど、どうにもならず、給仕さんをじいーと見ていました。やっと気付いてくれて、近よって来てくれたけど、私は何も言えませんが。デザートになにも手を付けていないので、分つていてくれたらしく、私はニタタと笑いました。

その給仕さんは、フォークを振り上げると、ビスケットにたたきつけて、割って、パキッ、パキッと、小さく割つてくれました。途中で、フルーツポンチの中が、パツと飛び出しました。

給仕さんは、ニコツと笑って、フォークを渡してくれました。私はサンキューとも言えず、ニコツと笑っていました。

それを食べ終えると、「コーヒー」か、「紅茶」か、と、聞きにきました。私は「コーヒー」を頼みました。待っている途中で、他の外人さんが二組ほど来ました。なかなかコーヒーが来ないので、ドキドキしてきました。もしかして、忘れられているのではとか、もういいのにアホみたいにここに座わっているのでは、とか思つて、帰ろうかと思いましたが、ガマンして待っていました。

しばらくすると、持つて来てくれました。

私は急いで飲んで、逃げて部屋へ向かいました。部屋に行く途中で、人がついてくるよ

うで、気持ち悪かったです。

部屋につくと、ホツとしました。

そして、デザートの事などを話しました。

次の日、みんな元気でした。

(由紀子)

初めての外国

I

わたしは、今年の夏休みに、お父さんとゆきちゃんので、インド旅行に行きました。

飛行機に乗るのは、初めてなので、すこし心配しました。そのとうりになってしまいました。よってしまいました。お父さんがはげと言ったので、後ろのトイレではいたら、すこし前に飲んだクリームソーダーと氷が、ガラガラと口から出てきたので、お父さんは、すごくびっくりしていました。わたしもびっくりしました。あとで、お父さんが、ゆきち

やんに、

「とも子のおなかの中は冷凍室より冷たかったんや」

と、こうふんしながら言っていました。

タイに着きました。

ホテルの冷蔵庫の中に、ジュースがありました。でも、かんきりがなかったのです、飲めませんでした。(あとで分ったことですが、かんきりは、洗面台の下に、取り付けてありました。)夜、中華料理店に行きました。その店は、テントのような所の下に、机やいすが置いてあって、そこで食べました。その店のかにやえびを見ていたら、生きていたので、びっくりしました。かには、はさみの所をしばって、積んでありました。えびは、水槽に入っていました。そこで、一番はじめに、えびの炊いたのを食べました。次に、かにの炊いたのを食べました。どちらもとてもおいしかった。

次の日の朝、6時30分、昨日予約してあったのでホテルまでむかえに来てくれました。女の人がガイドでした。わたしは、タクシーの中で、鼻血を出してしまいました。ポートに乗って水の上で生活をしている人たちを見学に行きました。水はとてもきたなかつた。その水で、人々は体を流したり、うがいをしていました。わたしは、「きたないな」と思

いました。でも、ずっと行くときれいなお寺がありました。わたしは、「すごい」と、さげばしました。写真を撮うつしました。一番目に水上マーケットに止まりました。そこで私は半ずぼんを買いました。お父さんは、わにのベルトを買いました。そこにはキラキラと光る物がたくさんありました。水上マーケットの女の人たちは、パジャマみたいな服を着ていました。きれいな人ばかりでした。30分すぎたので、ボートに乗って出発しました。

大きな船を家にしている所もありました。その中は、何でもあるそうです。テレビもあるそうです。途中で、舟でくだ物を買りに来ました。ボートのガイドの人が買いました。みんなが食べていたので、わたしも食べました。モンキーバナナを食べました。それは、自分の家で食べるのより黄色で、すこしかたかった。ランブータンというのは、赤色をしていくくだ物です。それは、あまかったたので、とてもおいしかったです。

次に動物園のような所に止まりました。そこで大きな長いへびを見ました。ぞぞーとしました。色も気持ちが悪かった。ワニも見ました。ワニは、まるで死んでいるみたいにすこしも動かなかった。わたしとゆきちゃんど象にのりました。子象だった。象のせなかのつたら、ほねでいたかったです。その係の人が、わたしたちにモンキーバナナをわたしてくれたので、象にやりました。象が、前から鼻を出したのであげたら、上手に鼻で

つかんで食べました。それをお父さんが写真にうつしてくれました。とても楽しかったです。

II

インドのカルカッタに行きました。

ラーマクリシュナミツシヨンというホテルに泊りました。そこでシャワーをあげました。まわりはセメントで、トイレがまる見えなのできたない気もしたけど、シャワーが気持ち良かったのでよかったです。

食堂に行きました。コーンフレークが出ました。それは、わたしにとってはおいしい物ではありませんでした。

夕方ごろになると、このホテルのルームボーイが来て、わたしたちのベッドの上にかやをはつてくれます。わたしのベットにかかっているかやは、ところどころがやぶれていたもので、赤いビニールテープをはりました。それがおもしろかったので、お父さんとゆきちゃんがわらいました。お父さんは、鼻を上にもかけてわらっていました。

朝になるとルームボーイがお茶を持ってきてくれます。そのお茶は、とてもおいしいで

す。毎日、かならず一回は雨がふって、次に停電になります。そのとき外のけしきを見るのがすきでした。とてもきれいだから。

わたしは男の子と10回以上もまちがえられました。

インドの人の目はとてもこわくて、じろじろ見られるとこわくなってしまふ。商売は、道のはしっこでやる人がけっこういました。まずしい人がお金をくれと手を出してくるとどきつとして、かなしくなってくる。電車に乗ったらとてもぎゆうぎゆうで、わたしはインドの人のおしりですぶれてしまいました。見上げなければお父さんやゆきちゃんが見えませんでした。

カルカッタの空気は、すぐきたなくて、タクシーに乗っていると、口の中にきたない空気が入るので、ハンカチでおさえてなくてはむねがわるくなるぐらいでした。

子どもははだかでした。女の人はサリーを着ていました。きたない水が道のはしっこにわき出ていました。その水で体をあらったりしていました。わたしはきたないなと思ったけど、カルカッタの人は、べつにきたないとは思ってないんじゃないかと思いました。牛がたくさんいました。牛が道のと真ん中にどんとすわっていました。

まわりを見回わすと、牛と人だらけだった。木やかべに牛のふんがかわかしてありまして。それは、子どもたちの仕事だそうです。

ホテルの水はすぐくまずく、わたしはあまりにも水がまずかつたのではいてしまいました。お父さんは、毎日ラッシーという飲み物を飲みに行く、もちろんわたしもついていく。

(智子)



見たこと、聞いたこと



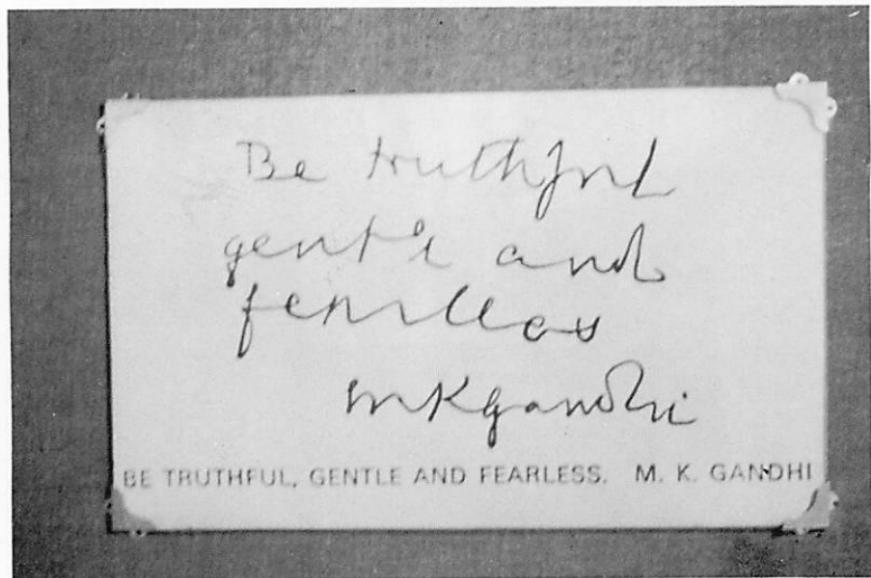
チャイ屋の少年、レンガの窯の上のミルクと紅茶は熱かった(ペナレス郊外)



長距離バスが出発を待つ(ラージギル)



壁にはり付いているのが牛糞燃料、インドの子供は世界一元気だ(ブッダガヤ)



「ガンディーミュージアム」にあったマハトマの直筆(デリー)
「正直であれ、寛大であれ、恐れるな」

牛、あるいは牛糞燃料

バンコクでエア・インディアのボーイング七〇七に乗りかえ、カルカッタに向った。水平飛行に移ってしばらくすると、ふたたびシートベルト着用のサインが付き、と同時に機は大きく揺れはじめた。稲光が走り、雷鳴が飛行機の中まで聞こえてきた。

突然、スーと落ちる。尻の下の座席が取れ、その下にできた巨大な空間にむかつて落下する如くであった。座席をすっかり掴む。手が汗ばんでくるのがわかる。女性の泣き叫ぶ声が機内のあちこちで起った。落ちるのが何回もつづいた。

揺れるのも落ちるのも止ったので、窓の外に目をやると、丸い窓を縦に区切る線が見えた。右半分が暗い茶色、左半分はうすい青色をしている。混乱した頭は、すぐにそれが何であるかわからなかった。しかし、うすい青色が大空で、暗い茶色が大地であることに気付くのに時間はかからなかった。飛行機の中では足は下で頭は上だが、地球表面を座標軸にとると、われわれ全員、九十度傾いて空中にあったことになる。

激しい雨のなかをくぐり抜け、機は無事、カルカッタのダムダム空港に着陸した。

着陸のときの加速度が完全に零になり、機が空港ビルに向けて滑走路をゆっくり自走しはじめた。舗装された滑走路の両側に、インドの大地が拡がっていた。

そこに白い牛が、一頭いた。

白い牛は、いくぶん痩せていたが、自分の横を通り抜ける巨大な人工の鳥に無関心に、草を食むでいた。

インドでは、人のいるところには、たいがいどこでも、牛がいる。日本でいえば、いまだ何の制約も受けずにのさばっている田舎の猫が、インドの牛に近い生き方をしているものになるだろう。

ただ、牛は、図体が大きいのでとても目立のだけれど。

一九八〇年の八月、山田則夫さんといっしょにカルカッタに行ったときのことである。

F M放送を聞くのと新聞を読むのを日課にしていた山田さんが、おもしろい記事があると言う。

「昨日、ハウラ橋で牛がたいへんだったみたいですよ」

そこには、牛が、ハウラ橋の電車の線路に蹄を挟まれ、人々は何時間もかかってそれを取り除いたと書いてあった。

ハウラ橋、それは、カルカッタの市街部の西側を南北に流れているフーグリー川に懸つた、長さ四五七メートル、幅三十メートルの鉄の大橋である。カルカッタには二つの鉄道の駅があり、そのうちのひとつハウラー駅は、この橋を渡ったところにある。ハウラー駅は、カルカッタの西の陸の玄関なので、この橋の上を、終日、駅に向う、あるいは駅から市街地に向う、電車、バス、タクシーが、接触寸前まで接近して、それぞれ己を主張する警笛を間断なく鳴し続けて走っている。

その大混乱、大雑踏のまっただ中に、牛が一頭身動きとれなくなったのだから、これは、立派なニュースといえるだろう。そんなところに迷い込んだ牛と、それを取り除こうとしている人々とを、私は、ホテルの一室で容易に想像できた。

八六年の八月に、カルカッタで目にした牛の数は、六年前のそれと比べて少なくなったように思ったが、統計資料は知らないのです、正確なことではない。

田舎にいくと、土壁に直径二十センチくらいの円盤状の薄い土方頭様のものが、何段に

も並べて張り付けてあるのを目にすることが出来る。そこには、五本の指がはつきりと写った手形が付いている。何十個もの円盤が、五段にも六段にもなつて横に延びている様は、幾何学模様といつてもよい。

これは、子供たちが、自分たちの仕事として、道に落ちてゐる牛の糞を乾燥させて燃料にするために壁にのぼして張り付けたものである。いわゆる牛糞燃料である。彼らは、頭の上の籠に牛糞を捨い集めて歩く。牛の糞は、そのほとんどが繊維だから、乾燥すれば立派な燃料になる。

土壤肥料の研究者である私の友人に、インドの牛糞燃料のことを話したところ、彼は、「だから、インドの大地は肥えられないのだ」と言った。

糞は栄養に豊んだ有機物なのだから、大地に戻すべきだというその人の説明は、至極あたりまえで私の常識の中にもすであつたものであつたが、その一般則をインドの現実にただちに当てはめるその学者の観点は、インドを旅行していたときの私にはなかつた。

大地を豊かにするであろう有機物が、熱と炭酸ガスと水とになつてインドの大気に消えていくのは、また、ひとつのインドの姿である。

リキシヤ

ホテルを予約せずにインドのどこかの駅に下り立ったとしよう。改札口に向ってホームを歩いているあなたは、荷物が、すでに半分は、リキシヤマンの手にあるのを見る。

「ホテルは？」

「……………」

「トモダチ、ホテル、ノープロブレム！」

彼らは客引きにとっても熱心で強引だから、駅を出たところには彼らの決めたホテルへと走っているのである。結構安くて良いところに案内してくれる。

普通リキシヤといえは、自転車で牽くものことであるが、カルカッタでは、人が牽くかつて日本でみられた人力車そのものもある。しかし、私のまわった北インドの都市では、それらはほとんどみられなかった。細い足の筋肉をいっばいに緊張させて、彼らはペダルを踏んでいた。

アグラは、かのタージ・マハールで有名な、デリーから鉄道で四時間の北インドの中部

市である。世界一美しいといわれている、白大理石のこの建築物を見物に、私はアグラに行った。

中年のリキシヤマンが私を捕えた。インドの人は、彫りの深い顔に立派な髭をたくわえているので、年以上に老けてみえる。その人も中年でなかったのかもしれない。前日の約束どおり、ホテルまで迎えに来てくれた。帰りの列車が予約してあったので、その時間までに市内見物をすませて駅に送りどけてもらうことで話がついていた。一九七九年で、一日分として二十ルピー払った、と憶えている。

タージ・マハール、アグラ城、と廻り昼食もその人といっしょに摂った。木陰にラーメンの屋台をおもわせる店が二・三軒あり、乾いたバナナの葉にカレーと飯をのせたのが出てきた。彼が右の指二本でそれらを混ぜて食べるので、私もまねて食べた。彼は、食事がすむとその葉を大地にすてた。スツと牛が寄ってきて、その葉を舐めた。私は、とてもおもしろく、同じように大地に葉をすてた。

「俺の家を見に来ないか」と、勧められたのは、私が昼食代を払ったからではないだろうが、理由など詮索しなくてもいいので、喜んで付いて行つた。

レンガと土で作つたその家は、山の仲間と冬山で作る大きな雪洞を思い起こさせた。入

口がひとつあって、入ったところが家全部である。左手奥に棚があり、パナソニックの銘板のある古いラジオがあった。ベッドが右手の奥にあり、母が寝るのだ、と説明された。われわれが入ったときには、誰もいなかった。その家は、大地の上に、それよりは乾燥した丈夫なしかし同じ素材である土からできた四角の蓋を置いたように、私にはおもえた。

彼は、インディラ・ガンディーによる産児制限がいかに神の摂理にそぐわないものであるかと朗朗と説いた。子は神の子でもあるのだ、彼女が失脚するのは当然である。と言った。

私は、日本に帰ったら手紙を書くからと、その人の名と住所を覚えてもらい、約束どおり手紙を出したが、彼からの返事は来なかった。

リキシヤは、われわれのような旅行者だけでなく、インドの人にとっても欠くことのできない交通手段で、家族三人ないし四人が一台に乗っているのを目にすることがある。そんなお客をのせて坂道にさしかかれば、彼らリキシヤマンは、全身から吹き出る汗を拭う間もないほどにガンバラなければならず、それを後から眺めて悠悠と乗っている精神構造をわれわれは持ちあわせていないので、私と娘二人は、二台のリキシヤに分乗して、プー

リの市内見物をした。

私を乗せてくれたリキシヤマンは、二十代の半ばぐらいだったろうか、すでに結婚していて子供が二人いる。田舎から出てきてこの仕事についてたらしいが、その日の稼ぎいかにかわらず、一日二十ルピー（三〇〇円）を、シャチャョー（これは日本語）に出さねばならない。駅からホテルまで二台で十ルピーだったから、毎日二十ルピーは結構たいへんだと思う。二十五〜六人の会社で、シャチャョーはえらい、と彼はさかんに言う。それは、いずれ自分もそんな身分になりたい、というのと、あこぎに取り立てるのでけしからん、というのと半分ぐらいに、私には聞こえた。

彼に何かあるたびに

「リキシヤマン……………」

と呼びかけていたら、彼にひどくおこられた。

「オレは、リキシヤマンという名前ではない。名前は……………だ」

誠に申し分けなく平謝りであった。

サルナートは、仏佗がはじめて法を説いた土地、初転法輪の地として、仏教徒なら一度

は訪ねたいと願っているところである。一九七九年の一月、私は、ベナレスからリキシヤに乗ってサルナートに向った。サルナートは、ベナレスの北東十キロにある。

道は車の幅だけ舗装されており、田圃の中を真直ぐに延びていた。十軒から十五軒くらいの小さな集落がすこし走るとあらわれた。その小さな集落の入口らしい道路の横で、ひとりの老人が右腕を枕に寝ていた。インドの一月は菜の花の咲く暖かい季節である。その人のそばに自転車の空気入れが一本あった。われわれが通り過ぎても、午睡中の彼はそのままであった。

帰りも同じ道を通って帰った。同じところに同じ人が寝ていた。その人の横にはあいかわらず空気入れがあった。

彼は、その日一日どれくらいの仕事にありついたのか。すくなくとも、われわれのリキシヤには一度もその必要はなかった。

チヤイ

インドは、鉄道が通っているような都市なら、たいてい英語が通じる。食べたり、泊ったり、移動したりするための英語ならなんとかなるが、様々な想いをそのままに口にする

ことは私にはおよそ不可能なので、意思を自由に伝えられず、すこしづつストレスが溜ってくる。そんなとき、緊張を解いてくれるのが、人から受ける親切と笑顔と食物とである。

ここでは、食物について。

インドの食物は旨い方に入らないと思う。旨くはないがインドの気候に合っていると思う。一粒づつばらばらになっているパサパサの飯に辛いカレーの汁をかけて食べていると、日本にいるときいつも悩まされるドロドロとした思考形式が除々に消えていくので、それはそれでとても快的である。しかし、まちがいに旨いといつて薦められるものもあり、その代表に温かいチャイをあげたい。

インド国内の移動は、もっぱら鉄道に頼っていたので、それも、夜どこかの都市を離れて翌朝に目的地に着く夜行列車がほとんどだったので、朝の冷気の中、列車がホームに滑り込むと同時に、

「チャイヤー」

「チャイヤー」

の、よく通る声を耳にすると、もう、それだけで疲れは半分以上消えてしまう。ほっとし

た気分になる。チャイ売りの少年たちは、列車が駅に止っている間に車内でチャイを売る。熱いチャイの入れ物は、たいていは、緑色をおびた厚いガラスのコップだが、ぐい呑みをひとまわり大きくしたくらいのもあり、そんなとき、赤茶色の器を口にする、甘くて温かいミルクと紅茶の中にインドの大地の味がする。細かい細かい土の粒子が、器も味覚であると主張している。空になった素焼のコップは列車の窓から線路に捨てればいい。雨がそれらをもとの土に戻してくれる。

ブツダガヤは釈尊成道の地である。悟りをひらかれたブツダシャーキヤムニは、ブツダガヤを出てベナレスにむかわれた。初めて法輪を転ずるためである。私はブツダガヤからガヤまでは、世尊と同じルートをとることを日本を出発する前から決めていた。

一月のインドの日中は、日本の初夏をおもわせる気候である。ザックを背に一月のインドの空の下を歩くのは、とても気持ちがいい。馬車でブツダガヤに入ったときは、この同じ道の子供たちがいつまでも「バクシーシ」「バクシーシ」と追いかけてきたが、ザックを担いだ貧乏旅行者には彼らは無関心で時々道ばたの子供が、

「ナマステ」

と声をかけるだけである。

自転車に乗った青年が私を追い越した。彼は、突然用事を思い出したように止まり、振りかえった。

「ウオット、タイム」

私がかまわって腕時計を差し出すと、彼は、時計にすこしふれて、につこり笑って走り去った。道路脇に大きな木が木蔭を作り、そこにチャイ屋があった。それは、植物の葉で葺いた、雨露を凌ぐ程度の軒を出した間口二間足らずの店で、丸いテーブルがひとつ置いてある。奥の窯の上の鍋から、湯気といっしょに、紅茶のよい香りがする。

インド男性の腰まき、ドーティーを捲いた店のおやじは、店に入ってきた私を見て、

「ハーフ？」

と尋ねる。

私は、ハーフではなくピュアな日本人だと言おうとしたが、そんなくだらないことにインドのおやじが関心を持つはずはなく、出かかった言葉を抑えてその人を見れば、彼は、インドのチャイ屋ならどこでも見られるガラスのコップを持ち上げている。

「ハーフ？」

私はただちにすべてを理解して、大きな声で答える。

「フル、フル」

いっぱいほしいんや。彼は、お厚いコップに熱いチャイをなみなみと注いでくれた。ミルクと砂糖の他に香辛料が加わり、そのチャイは最高であつた。

チャイの味が懐しく日本に帰つて作つてみるが、インドで飲んだようなミルクテイはでない。それは、旅行中という、日常生活とはいささか遊離したある種の興奮状態にある状況のもとで飲んでいたので、きっと、心的な要素が味を決めていたのだと、かつてに了解していたが、そうではなく、ミルクにちがいがあることを教えられた。

乳牛が、日本ではホルスタインだがインドでは水牛であるので味に差があるのだろう、とその人は言った。彼は、北インドのラジャスタンに二年ばかりいた若い日本の仏教学者である。

「水牛を家まで連れて来て目の前で乳を搾り、それが牛乳配達ですよ。ミルクの味が全然ちがつていたなあ」

彼は、そう言うことで、半分ぐらいインドにワーブしたようだった。

私は、辛島貴子著『私たちのインド』のなかに同じことが書かれていたのを思い出した（それは、南インドのマイソールのことだったが）。あらためて読み直すと、たしかに、水牛とある。

そうか、牛がちがうのか。

私は、この簡単な結論がとても嬉しかった。

バ　ス

カルカッタではよくバスを利用した。われわれ親子のいたゴルパークから都心部のマイダン公園まで、大混雑が四六時中つづいている通りを三十分ばかり走って、五ルピーでお釣りがきた。三人分である。一九八六年のレートが一ルピー十二〜三円だったから、六十円以下になる。

市内を走るバスは、三種あるようだった。黄色のボデーに太い黒の線を入れたミニバス、日本でいえば、三十人乗りのマイクロバスくらいの大きさである。これは、比較的きれいでしかも速いから、料金はすこし高い。ただし、天井が低く背の高い人だと真直ぐに立ってられない。目的地に着くまで首を曲げていなければならぬ。二階建てバスも、かな

り古いものだが、走っている。二階に上って街を見下して走るのは気持ちがいいが、ハウラ橋の近くでひっくりかえっているのを見た。三番目が普通の乗り合いバス、大きさは、日本の市内バスよりいくぶん大きいかもしれない。いつも非常に混んでおり、古いものが多い。窓ガラスが一部ないものもあるが、ホット、ホットター、ホットレストの三つの季節しかないインドでは、必要ないようだ。雨が吹き込んでくることはあるが。

われわれが停留所で待っていると、バスはゆるゆると走ってきて、完全に停止しないで客をひろっていく。タラップに立って大声で行先を叫んでいる助手が、われわれを中に引きずり込む。そこで踏み外したりすると、乗ろうとしているバスに轢かれかねない。いっしよに旅行していた友人が、もうすこしでそうなるどころだった。

かの助手は、バスのポデーをバンバン叩き行き先を告げるのが仕事だから、切符は扱っていない。別の人がもう一人乗っていて、切符はその人から買うことになる。この車掌氏は、細かく折り畳んだ札を五本の指の間にいっぱい挟んでいるので、いっぺんにわかる。運転手はもちろんいるから、一台のバスに乗務員が三人である。

満員で中に入れない客は、窓枠に必死にぶら下がり、適当なところで下りる。あれは多分目的地に着いたからなのだろうが、なかには腕がくたびれて途中で下りる人もいるので

ないかと思う。次に来たバスにぶら下っていけば、また、ただなのだから。

これらの市内バスは非常にオンボロで、日本なら九十九パーセント以上スクラップいきだろう。しかし、^{プリンシパル}原則の国インドでは、エンジンとハンドルと客を運ぶ部分があれば、バスは走る。

有名な観光地にいけば、完全冷房のバスもある。これは、外国から来た観光客用で、とてもきれいでモダンである。ドアが開いて客が出てくると、あつというまに子供たちが集ってきて手を出す。

「バクシーシー」

「バーブー、バクシーシ」

ラージギルからガヤに帰るのに乗ったバスが途中で止まり、ここが終点だからと、全員が下りはじめた。友人と私は、そんなつもりでなかったのでおおいに困ったが、それ以上行かないのなら何か別のものを探さなければならない。そこはよくしたもので、すぐに客引きがあらわれた。

「ガヤまでジープが行く。乗らないか」

「いくら?」

「やすい」

「どのジープ?」

彼は、幌のついた小型のジープを指差した。

後部の幌を挙げて入ろうとして驚いた。もう立錐の余地もないほどに混み合っていたからだ。なかで我慢強く待っていた人たちが、また来たかという眼差しでいっせいにわれわれを見たが、私の友人はそこになんとかもぐり込んだ。それで、再び、もうこれ以上入れない状態になった。なかの客たちが、私に前の助手席にまわるよう言うので、私は前にまわって今度は絶望的な気分陥った。すでに五人の客が運転席も含めて座席を占めていたのである。そこにわり込めということが信じられなかったが、次のバスがいつになるかわからない以上これに乗り込むより他ない。山小屋では畳一畳に三人寝ることがあるというが、そのジープ版である。

私は、運転席に座わりハンドルに手を掛けている人に尋ねた。

「いつこのジープは出発するのですか?」

「わからない」

「わからない？」

「はい、私は運転手でないのですから」

しばらくして、もうこれ以上詰め込めないことを悟ったのか、先ほどの客引きがやってきて、運転席側のタラップに足をかけた。彼がドライバーであった。身体の半分以上を外に出し、わずかにねじり込んだ足となんとかハンドルを握んだ左手だけで、彼は車を発進させた。

そのままの姿勢で運転を続けていくのは、けっこう疲れる仕事であることにまちがいはないが、それより、こちらは、車一幅分しか舗装してない道路で対向車とすれちがうときにみせる、ドライバー氏の身のこなしに感心した。彼は、身体の半分以上を車外に出したままスピードを落さずに対向車に向っていき、すれちがう直前で、体操の選手が鉄棒に上がるようにするあの腕力で車を自分の方に引き寄せるのである。もちろん、彼の方がジーブにくっつくのだが、眺めていると、彼がジーブを引き寄せているように見えた。

そんなことを繰り返しながら、しかし、客は除々に残っていき、ガヤに着くころにはかのドライバー氏はハンドルの正面に座って少しもの足りなさそうにジーブを走らせていた。

あとがき

一九七八年十二月二十七日、私は、ドアをたたくルームボーイの声で目を覚めた。彼は、部屋の外で、「新聞」とさげんでいた。それがインドで迎えた最初の朝であった。

新聞を受け取って、五十パイサ——それだけが、そのとき私の持っていたインド通貨のすべてであった。換金前のはずだったが、どうして五十パイサだけあったのか、今ではもうわからない——をチップのつもりで渡そうとすると、年配のルームボーイはこんなことはこの世にあり得ることでないといった表情で、受け取るのを拒絶した。偉厳のある顔であった。三ルピーでオーケーしてもらったのを憶えている。

ホテルの部屋は二階にあった。朝の冷気が部屋に流れ込んできた。中庭で鳴く鳥の声が聞こえる。私は、やっとインドに来たのだと思った。

同じ飛行機でニューデリーに来て、二週間後再びいっしょに帰ることになっていた二十名足らずのわれわれのツアーの中から、カルカッタを往復する浅見幸夫さんと鶴川博さん、ブツダガヤのサマンバヤアシラムに用事のある厚川直子さん（彼女は結婚して、今は、

中里直子さん、それに、アグラーベナレスーブツダガヤと三人と同じ方向に進む小生の四人が、なんとなく気が合つて、そのあと、ブツダガヤまで行動を共にした。それは、二週間足らずの旅のうちの大部分であつた。また、実に楽しい旅であつた。

飛行機は、行きも帰りもパンナムの世界一周便になつていた。行きが西廻りの世界一周便、帰りが東廻りであるが、帰りの便に三時間以上の遅れが出た。それは、テヘランでゴタゴタがあつたからだと説明されたが、イラン革命のはじまりであつた。

パンナムの世界一周便も、昨年で消えた。

二回目は、一九八〇年七月三十日から八月十日まで。大阪からカルカッタを往復した。一回目には見えなかつたインドの貧困の凄まじさが、このときから見えてきた。

黒色のボディーに黄色の屋根のインド国産車アンバサダーのタクシーに乗り、ダムダム空港からカルカッタの市街地へと向つていた。

乾期だと車の窓は開けない方がいいと聞いていたが、八月の窓から入る風は熱風ではなかつた。

外を眺めていた私は、土の中から人が出てきた、と一瞬思った。また、土の中に入って

いく、と。大地と家の区別はなかった。ほとんどが裸で、人々の肌の色も家の色と同じであった。はじめて目にするスラムのシヨックは大きかった。私は、何をしにインドに来たのかと、何回も何回も自分に問いかけていた。

このときいっしょに行ったのは、同じ職場の山田則夫さんで、彼は、痩せており体力があるようにはみえなかったが、食欲は旺盛で一度も病気にならなかった。

八月のインドは雨期である。日に二度、決った時間に、バケツの水をひっくりかえすという全くその通りの雨が降るのが、とてもおもしろかった。スコールの後は、すこしだけ暑さが凌がれた。

旅の目的が、ラージギルの仏跡とナーランダの大学跡であったので、カルカッタからガヤまで鉄道で行き、そこからバスに乗って北上するルートになっていた。ガヤの駅は、前の年にも利用している。待合室のポスター、破れた机子のカバー、寝そべっている牛、駅舎の前のリキシヤ等、一年前のままだった。

三回目は、娘二人を連れてインドに行った。一九八六年八月二日～八月十六日まで。バンコク、ダッカとストップオーバーしながらの旅になったので、インド国内では、カ

ルカッタとプーリを往復しただけであった。

旅先で病気になったのも今回がはじめてであった。

プーリを離れる日、駅までわれわれを見送りに来てくれた人がいた。それは、はじめ誰だか分からなかったが、いつもの制服を脱いだホテルのルームボーイの一人だった。彼は、薬を買いに薬局に走り、用法と用量を丁寧に教えてくれた。

小柄で色黒のその人の笑顔を、私と娘二人はいまでもはっきりと憶えている。

子供をつれてどこか海のむこうに行こうと決心したのは、いつだったのか定かでないが、ここ二、三年のことだと思う。ちょっと隣の町まで自転車です足を延ばす感覚で、子供たちと飛行機に乗って国を出る。それが基本方針であった。

上の娘が中学生になる前に実行する計画だったので、今回の娘二人に私だけの旅となった。次は、下の子供二人に妻と私との四人でどこかに行くつもりである。

これら三回のインド旅行はどれも二週間前後の短い旅である。そして、まわったところは、デリーからカルカッタまでの鉄道沿線をほんのすこし出たところといっていいくらい狭い範囲である。しかし、狭くともインドにはちがいない。

インドに行くとは人は何か書きたくなるという。それもあるが、私は、なけなしの金をはたいてするこれらの貧乏旅行をいつも心よく賛成し、家で留守番をしてくれるひとのため、これらの旅行を共通のメモリーにしたくなった。

それがこの小冊子である。

「ナマステ、インド」は、一九七九年一月三日から十日間、福井新聞に連載したものを、そのままもってきたものである。見出しも新聞のときのままである。拙いし幼いが、当時の雰囲気壊したくなく、何も手を加えなかった。

「娘二人つれて」は、一九八六年九月十四日から毎週一回、三週間続いたこれも福井新聞に連載されたものもとの原稿である。

「わたしたちも」は、このときの娘二人の作文である。親子でする旅もすがたいものだと思つた。

「見たこと、聞いたこと」は、この本のために書いたものである。三回の旅からひろつたので七年間の出来事がいりまじっているが、インドの時間の流れからいえば、ほんの瞬時のことになるのではないかと思う。

旅の思い出に耽っていると、「トモダチ、ヤスイ、ノープロブレム」というインドの人の声^が聞こえてくる。彼らは今もきつとどこかで、そう言っていることだろう。私は、また、そぞろ、海をこえてかの大^陸へ旅したくなるのである。

一九八七年二月

安い宿で旅をしてインド

検印省略
定価 570円

昭和62年 5月 5日 初版印刷

著者 早 川 博 信

発行人 早 川 博 信

発行所 コ ス モ ス 社

〒917-03 福井県名田庄村三重11-18
T E L (0770) 67-2769

印刷所 白 崎 印 刷 株 式 会 社

安い宿で旅をしてインド



早川博信